

2009 サイエンスパーク開催

小出展久

北海道が主催する「サイエンスパーク 2009」が平成 21 年 7 月 29 日、サッポロファクトリーで開催されました。この催しは科学技術振興機構や道立試験研究機関が中心となって、子ども達に科学技術を身近に体験して学んでもらおうと企画されたものです。平成 6 年から始まった試験研究機関「おもしろ祭り」が前身となり、平成 17 年には「キッズサイエンスパーク」にリニューアル、平成 18 年には科学技術振興機構との共催で「サイエンスパーク」にマイナーチェンジして現在に至っています。水産孵化場の中では研究 3 部が毎年交代で受け持ち、それぞれのテーマに沿って展示を行い試験研究成果の広報普及を図ります。今年のテーマは「さわってみよう水の生き物」と題し、タッチプールに泳がせた様々な川や沼の生き物を自分たちの手で触ってみようというものです。タッチプールにはフナ、コイ、ウグイ、ドジョウといったお馴染みのものから、ヤツメウナギ、ナマズといったなかなかお目にかからないものまでが泳いでいます。実はこの企画、ここ数年のサイエンスパークの中では一番人気で、是非、今年もやって欲しいと主催者側から強い要望があった企画なのです。

会場と同時に 2 基のタッチプールの周りは小学生で一杯になりましたが、難なく魚に触れて歓声を上げる子どもや、水面に手をかざしただけでなかなか水中にすら手を入れることもできない子どもなど様々です。さすがにお母さん達は顔をしかめて遠巻きに立っただけで、時折、子どもの手に捕まえられた獲物をシャメにとるのが精一杯のようです。子ども達も最初はウグイの小さいのを捕まえて遊んでいましたが、慣れてくると 30cm はありそうなフナやコイに挑戦で

す。中でもヤツメウナギやナマズは特別で、あのヌルッとした体に触れて歓声、捕まえて歓声、獲物をほめてもらおうとお母さんと呼ぶ声が飛び交います。

例年、この催しの来場者は全体で約数千人で今年も同程度の来場者で賑わったと考えられます。水産孵化場のブースだけでも実際に水の中に手を入れて生き物に触れてみようとした子ども達は、渡した使い捨てタオルの数から推測すると約 1,000 人は来て頂いたと考えられます。最初は元気だった魚たちも子ども達に触られ、時間とともによれよれになってしまいます。魚もかわいそうでしたが、子ども達もかわいそうな気がしました。川で遊ぶと危ないと言われ、池や沼、水たまりなども少なくなって、子ども達は水の生き物に触れる機会がめっきり少なくなってしまったのではないのでしょうか？ 30cm くらいの大きなフナを捕まえた子どもが「お母さん、タイだよ、タイ。」と得意げに獲物を見せると、お母さんも「ほんと、大きなタイ。」「それ、フナですよ。」と教えると「へえっ」と驚いた顔をして見直します。本で見るだけではなく実際に実物を見て、実物を見るだけではなく実際に生き物に触れて、生き物に対する新しい感触によって生き物がいよいよ身近なものになってくるのかもしれない。何度も何度もタッチプールのそばに来ては、しゃがんでずーっとのぞき込んでいる女の子がお母さんの「帰るよ。」との声に首を横に振ってじっと魚を見ていたのが印象的でした。あの子、大きくなったら水産孵化場に入るのかなと思いつつ、真夏の恒例事業が過ぎていきました。

(こいでのぶひさ：養殖病理部長)

